

日本スポーツ人類学会

第8回大会

「アジアのスポーツ文化交流」

発表抄録集



会場：九州国立博物館 ミュージアムホール

期日：2007年3月29日(木)・30日(金)

主催：日本スポーツ人類学会

九州国立博物館

プログラム

第一日目 3月29日 (木)

午前9:30 開館

午前10:30 受付開始 (一鈴15分 二鈴18分(発表終了) 三鈴25分(質疑応答終了))

	時間	演題	演者	座長
一般研究発表 ①	11:00～ 11:25	合気道競技の現状と課題 －柔道原理の視点から－	工藤 龍太 (早稲田大学大学院) (共同研究者: 志々田文明)	瀧元誠樹 (札幌大学)
一般研究発表 ②	11:25～ 11:50	近世における起倒流柔術の系譜	中嶋 哲也 (早稲田大学大学院) (共同研究者: 志々田文明)	瀧元誠樹 (札幌大学)
昼食・休憩(70分)				
一般研究発表 ③	13:00～ 13:25	ナップートにおける身体観・身体技法 について	瀬戸邦弘 (早稲田大学)	石井 浩一 (愛媛大学)
一般研究発表 ④	13:25～ 13:50	インドネシア伝統スポーツフェスティバル にみる伝統スポーツの開発	石井 浩一 (愛媛大学)	木内明 (東洋大学)
一般研究発表 ⑤	13:50～ 14:15	北米ネイティブの生活と「ボールゲー ム」の語り	山口順子 (津田塾大学)	真田 久 (筑波大学)
一般研究発表 ⑥	14:15～ 14:40	19世紀初頭ロンドンにおける闘犬文化 複合 －1832年の下院特別委員会報告書を 手がかりとして－	松井良明 (奈良工業高等専 門学校)	竹谷和之 (神戸市外国語大学)
休憩(10分)				
一般研究発表 ⑦	14:50～ 15:15	戦後の性風俗雑誌にみる女相撲に関 する言説とその変遷	一階千絵 (早稲田大学)	三井悦子 (椋山女学園大学)
一般研究発表 ⑧	15:15～ 15:40	諏訪信仰における鷹狩の役割	大塚 紀子 (早稲田大学大学院)	瀬戸口照夫 (鹿児島県立短大)
休憩(10分)				
キーノート レクチャー	15:50～ 16:20	「海のスポーツ文化交流 －南西諸島の舟競漕を中心に－」 安富俊雄(梅光学院大学)		
休憩(5分)				
特別講演	16:25～ 17:00	「スポーツ人類学と私」 松浪健四郎(衆議院議員)*		
17:15～	懇親会			

* 松浪健四郎会員による特別講演は、国会の状況により中止となる場合があります。

懇親会会場: うぐいす茶屋 (太宰府市宰府 4-7-13 太宰府天満宮東神苑内 TEL092-922-4120)

太宰府天満宮横、菖蒲池脇のお茶屋さんです

第二日目 3月30日(金)

午前9:30 開館 受付開始

	時間	演題	演者	座長
一般研究発表 ⑨	10:00～ 10:25	モーションキャプチャを利用した舞踊 動作のデジタルアーカイブ化研究	遠藤保子 (共同研究者: 八村広三郎、崔雄)	吉川周平 (京都市立芸術大学)
一般研究発表 ⑩	10:25～ 10:50	バレエにおける右回転重視の意味に ついて	國寶 真美 (早稲田大学大学院)	杉山千鶴 (早稲田大学)
一般研究発表 ⑪	10:50～ 11:15	日本の武道の検討 一剣の思想と新陰流	朴 周鳳 (早稲田大学大学院)	宇佐美隆憲 (東洋大学)
一般研究発表 ⑫	11:15～ 11:40	武術を通じた町づくり	李承洙 (韓国中央大学)	熊野晃三 (長崎純心大学)
昼食・休憩(65分)				
シンポジウム	12:45～ 14:30	「アジアの武術交流」 司会: 寒川恒夫(早稲田大学) 「旅する武人」 瀧元誠樹(札幌大学) 「アジアの中国武術交流」 馮宏鵬(日本体育大学) 「16世紀以降東アジアの文化交流」 朴貴順(韓国靈山大学校)		
休憩(10分)				
特別企画①	14:40～ 15:20	「相撲埴輪の登場とその歴史背景」 河野一隆 (九州国立博物館) (司会:高倉 洋彰 (西南学院大学 九州国立博物館評議員))		
特別企画②	15:20～ 16:00	「蹴鞠の故実」 猪熊兼樹 (九州国立博物館) (司会:高倉 洋彰 (西南学院大学 九州国立博物館評議員))		

総会 16:00～16:45

懇親会会場: うぐいす茶屋 地図 (29日)



一般研究発表

一般研究発表①

合気道競技の現状と課題 —柔道原理の視点から—

工藤龍太(早稲田大学大学院)

志々田文明(早稲田大学)

合気道競技は富木謙治(以下、富木)によって1970年頃に始められた。富木は講道館柔道(以下、柔道)と合気道の両方を修めていた。そして富木は、1940年頃より講道館で開催された「離隔の技の研究委員会」の講師であり、柔道よりも離れた間合からの攻撃に対して柔道の技で如何に対処するのか、生涯研究した人物であった。これは、柔道が目的とする勝負法の追求であった。

こうした経緯から富木の創始した合気道競技は、柔道原理をもとに、当身技と関節技と投技からなる組み付かない間合における技術体系を持つ。

しかし現在の合気道競技では、柔道原理が活かされているとは言い難い。つまり、攻防の展開が柔道と同じ間合で行われているということである。それは、ルールの制約、選手の意識(勝利至上主義)、優秀な指導者の不足などが原因と考えられるが、何れにせよ離隔態勢から技をかけるという姿勢が見られなくなったと言えるだろう。

本研究では、合気道競技を発展させるために、富木の唱えた離れた間合いからの攻防について再検討を試みた。

一般研究発表②

近世における起倒流柔術の系譜

中嶋哲也(早稲田大学大学院)

志々田文明(早稲田大学)

講道館柔道(以下、柔道)は嘉納治五郎が江戸時代に勃興した武術を変容させたものと考えられるが、具体的にどのように変容したのかという疑問を解くためには、少なくとも江戸時代に興った武術諸流についての理解が不可欠である。そこで、柔道の成立に直接関与した起倒流について着目し、起倒流とはどういった流派なのかという包括的な知見を明らかにした。

特に先行研究では、起倒流の系譜に関する史料実証的な研究はみられない。系譜に言及している論文も使用する各伝書の出自が明らかでないものや、伝書の執筆時期など時間的な隔たり、執筆場所など空間的な隔たりなどを考慮していないという、実証性が保障されていないと感ぜられる内容も見受けられた。

本研究では、起倒流の諸伝書を根本伝書・基本伝書・応用伝書の3つに分類した。分類された諸伝書間の時間的・空間的な条件、伝承者間の関係を考慮しながら、起倒流の発祥と伝承について、実証的に明らかにしたい。

一般研究発表③

ナブートにおける身体観・身体技法について

瀬戸邦弘(早稲田大学)

本研究では、エジプト・アラブ共和国上エジプト地方で実践されるナブートにおける身体観、身体技法の考察を試みる。ナブートには実修者にのみ共有されるイーミックなレベルでの身体観が存在し、それを基とした身体技法が駆使され展開される。彼らの理解する身体観や身体技法はいわゆる「暗黙知」であり、上エジプトという限定された空間にのみ共有される文化コードといえる。

ナブートではこの競技に独自の攻撃・防御部位が想定され、実修者達は全身に点在するこれら部位をめぐり攻防を展開する。このような伝統的身体観をもとに展開されるこの競技を考察する事は、当該地域のエスノサイエンスを理解する上でも非常に興味深いものといえる。またナブートは単なる格闘技ではなく、競技の中に組み込まれている所作や礼法が当該地域の中で重要な働きを果たしているとも言える。実修者たちは独自の身体観を通して身体技法を展開するとともに、その他所作や礼法を通じて対戦相手との関係性を個人レベルで確認し、またその関係性を参集した人々に対して明示し、人間関係の確認・再生産をも行っているのである。

一般研究発表④

インドネシア伝統スポーツフェスティバルにみる伝統スポーツの開発

石井浩一(愛媛大学)

本研究発表では、インドネシア伝統スポーツフェスティバル(Festival Olahraga Tradisional. 以下 FOT)が、政府による伝統スポーツの開発を意図して行われているものであることを述べる。方法は、参与観察、聞き取り、文献読解による。

FOTは2002年が第1回で、第4回は2005年、東カリマンタン州で開催された。概容は、2日間に30州からの代表団による30種目の実演発表。それを青少年スポーツ省、国民教育省、有識者による審判員が採点。上位を表彰するというものである。この内容と合わせて、FOTの指針を読むと、FOTがスハルト時代の開発政策に連なるものであることが見えてくる。すなわち、76年から約20年かけて行われたインドネシア全土の伝統スポーツプロジェクトでは、まず各地方の未知の伝統スポーツを発掘し、文字化した。次に、FOTという伝統スポーツ開発の場を設定し、その中から将来国民スポーツとしてふさわしい種目の候補を選択するという意図が読み取れるのである。と同時に、FOTは45年憲法の国民文化規定を具現化したものといえる。

一般研究発表⑤

北米ネイティブの生活と「ボールゲーム」の語り

山口順子(津田塾大学)

本研究は、何世代にもわたり、くり返し伝えられてきた北米ネイティブの「ボールゲーム」の物語を、共同体の重要な規範の享受・継承における生活の知恵、または深層の精神文化として理解し、その具体的な姿を抽出することである。

ここでは2つの相異なる結末をもつ北米南東部の物語と北部の物語を参照し、比較検討する。具体的には、北米南東部は、1)現在のジョージアおよびオクラホマ州におけるインディアン共同体のクリーク(Creek)またはムスコギー(Muskogee)の物語、さらに、2)ノースカロライナおよびオクラホマ州のチェロキー(Cherokee)共同体のバージョン(英語版 1992)を使用する。さらに、北米北部の事例として、3)カナダ・オンタリオのオジブウェイ(Ojibway)の物語を取り上げ、北米南東部の2つの物語の差異を北部の物語とともに解釈するとともに、北米の北西部には同様の物語が見られない背景も合わせて検討する。

一般研究発表⑥

19世紀初頭ロンドンにおける闘犬文化複合 —1832年の下院特別委員会報告書を手がかりとして—

松井良明(奈良工業高等専門学校)

本研究の目的は、イギリスにおける動物闘技の近代化過程に関する研究の一環として、1832年に公表された「動物虐待法」に関する下院特別委員会報告書を手がかりにして、19世紀初頭のロンドンにおける闘犬文化複合を検討することにある。その結果、明らかとなったのは以下のような点であった。

1. 社会文化については、18世紀に普及していた「パトロン・スポーツ」という歴史的スポーツ形態との連続性が認められ、ルール確立とパトロンを中心とする試合の「組織化」が保持されていたが、全国的な統轄団体は存在しなかった。
2. 技術文化については、闘技場、飼育家、訓練法などの「専門化」が進んでいた。
3. 精神文化については、「パトロン・スポーツ」の影響もあり、ギャンブル・スポーツとしての側面を色濃く有していた。また、パトロンが主催する試合では一定の「合理化」も見られたが、それ以外の試合では著しい「残酷性」も認められた。

1835年に施行された「動物虐待法」が闘犬を違法としたのは、そこに「動物虐待」と「風紀紊乱」を見出したからであったが、それは同時代の闘犬文化複合に見られた「階層の混在性」に起因するものだったと考えられる。

一般研究発表⑦

戦後の性風俗雑誌にみる女相撲に関する言説とその変遷

一階千絵(早稲田大学)

日本の民族スポーツである相撲は、男性だけでなく女性も行ってきた。しかし女性の相撲(以下、女相撲と表記)は猥褻な見世物とされ、従来の相撲文化研究において研究対象とされることが少なかった。このような論調が存在する背景として、女相撲を性風俗と結び付けて語る風潮が存在したことは無視できない事象である。

本研究では、女相撲に関する記事を多数掲載していた『奇譚クラブ』(1947～1975、曙書房)を中心とした性風俗を扱った雑誌の記事をもとに、女相撲に付されたイメージとその変遷を追った。

同誌における記事には、女性の格闘に見出す美をさす「女闘美(めとみ)」「女斗美」「メミ」とも表記すると称する概念を通じ女相撲の理想像を描くものが多数見られた。寄稿家により美や魅力を見出す点に多少の違いはあるものの、女相撲の魅力をエロティシズムと密接な関連を持つものとして語る姿勢は共通している。

同誌以後の雑誌においては、女相撲は美意識よりもサディズム・マゾヒズムとの関連のもとに、競技性が排除される文脈で語られることにより、女相撲はスポーツではなく性的娯楽の一形態とする言説の再生産が見られる。

一般研究発表⑧

諏訪信仰における鷹狩の役割

大塚紀子(早稲田大学大学院)

古代から信濃国諏訪は狩猟民族の棲む地域であり、山鹿山麓は神野(こうの)と呼ばれ、諏訪明神の御狩場であった。中世に入ると諏訪大社は時の政権の力を得て、広大な荘園を有する神(みわ)氏一族として成長し、現人神である大祝(おおほうり)は諏訪氏として武士集団の長となりその地を治めた。

諏訪大祝一族からは鷹上手と言われる諏訪敦家、諏訪流の祖とも言われる祢津貞直(神平)などの鷹匠が輩出され、御射山祭において贅鷹の神事を行っていた。鎌隼と呼ばれた鷹によって捕えた獲物を供える行為は、神の化身である鷹が農民を助けるという伝承に見られるように、狩猟と農耕が山の神によって密接に結びついていたことを表している。風を鎮め農民を助けるための薙鎌(ないがま)(投鎌)の神事は、隼や鷹の風を操るかのような飛翔と害鳥を追い払う能力に対する憧憬の念を髣髴とさせるのである。

諏訪氏が武家となる一方で、諏訪信仰の広がりと同時に諏訪一族は全国的に広がっていった。筆者は神事から遊芸・武芸として受け入れられた鷹狩が、祭政分離によって諏訪信仰から独立していく様を考察し、鷹匠が武家の職人集団になったことを一因としてあげる。

一般研究発表⑨

モーションキャプチャを利用した舞踊動作のデジタルアーカイブ化研究

遠藤保子(立命館大学)
八村広三郎(立命館大学)
崔雄(立命館大学)

今日のアフリカにおいては、植民地支配によって宗主国文化が強要された歴史とさまざまな国々の人材、物質、情報の流入により、伝統的な生活様式、思考法、世界観が変化してきている。特に伝統的な舞踊や音楽は、欧米の影響により軽視され、消失してしまう危険性をはらんでいる。本研究の目的は、舞踊という時間の流れと共に消失してしまいがちな情報をモーションキャプチャというデジタル技術によって計測・保存し、これを後世に継承すると共に、蓄積された舞踊データの特徴量を抽出し、舞踊の構造を解明することである。研究意義は、デジタル化した舞踊データを解析することによって、舞踊の熟達度、年齢・男女差が物理的にどう現れるのかが明らかになり、芸の伝承や上達に有益であると期待される。研究対象は、ケニアのプロの舞踊家 6 名による代表的な6つの伝統的舞踊、収録は、2006年8月9、10日、立命館大学アート・リサーチセンターで行った。研究方法は、光学式モーションキャプチャを利用して舞踊動作の3次元データを収録し、胴体の動きに着目しながら全体の動きの速度や角度変化などを解析し、その解析データと社会・文化とのかかわりを考察している。

一般研究発表⑩

バレエにおける右回転重視の意味について

國寶真美(早稲田大学大学院)

バレエの象徴的な動きの一つに回転がある。しかしその象徴的な動きを作品を通して見ていくと、著しく右回りの回転が多いことに気付く。本研究ではバレエにおいてどのような理由により右回転が重視されるのかを明らかにすることを目的とする。

左右の違いを考えるにあたり、効き脚というものを考えがちであるが、バレエのレッスンの場においては必ず左右は同じように使うよう教えられていること、また舞台上でも回転以外の動きは左右同じように行われていることから、バレエでの効き脚は特に存在しないものと考えられる。そして作品分析の結果、特にクラシック・バレエの古典作品の中のグラン・パ・ド・ドゥでの右回転が際立って多いことがわかった。

よって、クラシック・バレエの形式を確立した振付家マリウス・プティパの空間の使い方や形式確立のルーツを探ることによって、バレエの右回転重視の理由も解明できるのではないかということがわかった。

一般研究発表⑪

日本の武道の検討 — 剣の思想と新陰流

朴 周鳳(早稲田大学大学院)

日本の武道は現在、実際にわれわれの社会の中で一つの文化として存在しているが、それを人類学的な見方ではどう捉えるべきか。

それを、江戸時代武士階級から生まれて武士の表象になり、さらに実用性のみならず心法や心構えまで論じるようになった、刀の文化から考えてみたい。

刀は強い殺生性を持っているが、この思想は決して殺生の切り合いででない。むしろ人を生かす活人剣の要素が強い。自分が強くなることは相手との関係の中で可能になり、肉体的強さよりも、刀の刃の下では皆が平等という考えを持っている。

武道が武術や武芸ではなく、武「道」になれるのは、「道」というのが、人の修業の道であり、人を大事に思う道であるからである。故に、人を思い、この人たちが行った武道は人類学の日本的対象になるのではないか。

このような武道を、江戸時代から伝承されている新陰流を用いて明らかにしたい。新陰流は徳川将軍家の兵法思想になり、袋撓いを考案して安全に剣の理を求めた。さらに組太刀という稽古法で相手との関係を大事にし、そこから自分を磨いた新陰流の剣術を通じて日本武道の模様を探りたい。

一般研究発表⑫

武術を通じた町づくり

李承洙(韓国中央大学)

現在、韓国ではさまざまな伝統的武術を素材とした地域祭りが繰り広げられている。本研究は、毎年 10 月に開催される忠州世界武術祭を事例として、この祭りが町づくりと密接な関係にあることを明らかにし、文化人類学的考察をおこなうことを目的とする。研究方法には 1998 年から 2006 年にかけて断続的におこなったフィールドワークと参与観察を用いる。フィールドワークでは、祭りの主体的役割を担う関係者、地域内の文化知識人、武芸関係者らへの聞き取り調査を複数実施した。調査の結果、はじめに 1990 年から始まった地方自治制度が展開されるなかで、各地域で新しい祭りが創出される動きと連動して、1998 年から忠州でも忠州世界武術祭が開催されるようになったことが明らかとなった。つぎにこれに先立って、国家の重要無形文化財に指定された武術テグギョンの歴史化が地域内で展開され、それが祭り開催の動機づけとなったことが明らかとなった。最後にテグギョンを核とした祭りが始まり、展開される中、最近では祭りの観光化を通じた地域活性化の意図もあることがわかった。

日本スポーツ人類学会
「アジアのスポーツ文化交流」
第8回大会組織委員会企画

キーノートレクチャー (29日 15:50~16:20)

海のスポーツ文化交流 —南西諸島の舟競漕を中心に—

安富俊雄(梅光学院大学)

特別講演 (29日 16:25~17:00)

スポーツ人類学と私

松浪健四郎(衆議院議員)

シンポジウム (30日 12:45~16:30)

アジアの武術交流

司会: 寒川恒夫(早稲田大学)

シンポジスト	「旅する武人」	瀧元誠樹(札幌大学)
	「アジアの中国武術交流」	馮宏鵬(日本体育大学)
	「16世紀以降東アジアの文化交流」	朴貴順(韓国靈山大学校)

特別企画① (30日 14:40~15:20)

相撲埴輪の登場とその歴史背景

河野一隆(九州国立博物館)

(司会:高倉 洋彰 (西南学院大学 九州国立博物館評議員))

特別企画② (30日 15:20~16:00)

蹴鞠の故実

猪熊兼樹(九州国立博物館)

(司会:高倉 洋彰 (西南学院大学 九州国立博物館評議員))

海のスポーツ文化交流 —南西諸島の舟競漕を中心に—

安富俊雄(梅光学院大学)

四方を海に囲まれた日本列島にとって海は外との交流を拒む障壁であり、逆に外との交流を容易にする道でもあった。

一般にわが国が本格的に海外との交流を積極的にはかるようになるのは明治以降である。しかし、そのような状況の中で、わが国にも中世・近世と海外と活発に交流をおこなっていた地域があった。それは南西諸島をおさめた琉球王国である。南西諸島の中心地・沖縄本島は地理的にも中国大陸に近いこともあり、14世紀末頃から琉球王国の海洋民は中国を中心に東南アジア、南太平洋まで足をのばして交易をさかんにおこなった。

海上の道が開拓されると、海は文化交流が最もさかんになるところであった。そして、それを可能にし、支えたのが船である。船は、今日ではその存在感が希薄であるが、つい最近まで物質や人の輸送など交通手段として中心的存在であった。

琉球王国には交易をおこなうために進貢船のような大きな船もあったが、漁業など日常生活に用いられ、遠洋に出漁した船はサバニという沖縄独特の小型船であった。またサバニは豊穰祈願の祭事にも用いられ、その折競漕船としても多用された。周知のように競漕は中国からの影響が大きかった。舟競漕は今日では沖縄を象徴する年中行事にまで発展し「ハーリー」として親しまれている。

今回、与えられたテーマから東アジアの文化交流をスポーツの視点から考えてみるなら、そのひとつに中国や東南アジアにも見られるこの舟競漕(沖縄ではハーリー、中国では龍舟競渡と呼ぶ)をあげることができる。

ハーリーは14世紀末頃沖縄本島・那覇を中心にはじまったが、沖縄を代表する海人、糸満の漁師たちによって明治期以降、南西諸島一帯に広がっていった。そしてその影響は本土にも及んだ。

なお、糸満やその近くの港川ではハーリーをハーレーと呼ぶ。

ここでは中国の影響を受け、主に糸満の漁師の進出によって広がった南西諸島の舟競漕について考えてみたい。

特別講演

スポーツ人類学と私

松浪健二郎(衆議院議員)

略歴

1968年 州立 東ミシガン大学留学

1969年 全米レスリング選手権大会優勝(デトロイト市)

1970年 日本体育大学卒業

1975年 日本大学大学院博士課程単位取得

1975～78年まで アフガニスタン国立カブール大学で指導(国際交流基金より派遣)
以降、数多くのフィールドワークを行なう。

1988年 専修大学教授

1996年 衆議院議員(現在3選)

2004年 社団法人アフガニスタン協会理事長 財団法人日本レスリング協会副会長

主な著書:『アフガン褐色の日々』『身体観の研究』『古代宗教とスポーツ文化』『シルクロードを駆ける』『シルクロードの十字路』『格闘技バイブル』『折々の人類学』など多数

アジアの武術交流

司会： 寒川恒夫（早稲田大学）

武術が近年注目を集めている。一つには、世界チャンピオンを決定する国際競技としての魅力であり、一つにはアジアの文化とりわけ日本文化の質に触れる魅力である。武術は世界各地にその存在を認められるが、中国、韓国、日本の東アジアにおいて特に際立った発展を遂げ、その成果が今日の武術ブームを生み出している。

今回のシンポジウムは東アジア三国の代表者からそれぞれ問題提起をしていただき、東アジアにおける交流・相互影響の視点から幅広く討論を行い、今後の研究展望を拓く事を願って企画された。

旅する武人

瀧元 誠樹（札幌大学）

武術は、武の「術」である。「術」は「技」と置き換えることもできるが、「術」は大きな力を生む。武人の武術は旅や戦争などの経験、アクションを通じて獲得された叡知としての身体技法と言える。戦争も戦地や敵地へ赴く一つの旅とすれば、異境の地、奥深い自然の中を歩く旅人は、戦士として必要な戦いの術だけではなく、さまざまな危険な目に遭遇するため相応の護身術を身につけていた。日頃慣れ親しんだ土地を離れ、時として未知の自然のなかで行動する彼らには、天文学・気象学・地質学・薬学・医学などの知が必要とされる。こうした武人が必要とする諸学は、近代科学によって培われてきたものとは別の叡知と言うべきものである。武人の叡知は、経験によって蓄積され、伝承されてきたものとして考えられる。

今回のシンポジウムでは、まずは、日本最古の書とされる『古事記』を紐解いて古代の武人倭建命がどのように行動し武人の叡知を身につけていくのか見てみたい。朝鮮半島の新羅の武人花郎（ファラン）と比較してみると、共通項として、①容姿端麗な少年であり女装する、②遊び歩きをする、③歌舞（遊び）と④戦士としての能力に秀でていることが見出せる。倭建命と花郎がともに「あそびあるき」をしていることに注目したい。

『古事記』でいう「あそび」とは何か。筆者は、「あそび」とは、現と幽、生と死、日常と非日常といった境界領域で自然や神の力に触れることではないかと考える。幸をもたらされるように、邪は祓われるようにと祈り願いながら行われる「あそび」が、武の身体技法へと連なっていくと考えている。

そして現代に連なる旅する武人として、会津に生まれ、若い頃には琉球諸島や九州での武者修行をし、後半生は北海道を本拠地として活躍した大東流合気柔術中興の祖・武田惣角を採りあげたい。

武人が旅をすることで、叡知をどのように得ることができるのか考えてみたい。

アジアの中国武術交流 —明代における中国武術の武芸化を始点として—

馮宏鵬(日本体育大学)

中国武術のスタイルの形成期は、明代(1368～1644)にある。それは、今日における武術の練習や試合は明代からの「^{だん}段・^{とう}趟・^{とうろ}套路」という方法に則って行われているからである。これは600年余の間に進展してきた中国武術が、明代において「套路」という形式が誕生し、この演練の道筋を通して技が磨かれ、伝承されるようになったことを示している。今回のシンポジウムでは主に、今日の武術のスタイルの重要な形成期に相当する明代における武術の武芸化に注目し、そこから今日に至るまでのアジア(特に日本と韓国)の中国武術交流について発表していく。

明代における武術の武芸化、およびアジアの中国武術交流、それぞれの概要をまとめると以下のとおりである。

(明代における武術の武芸化)

様々な史(資)料を検討すると、明代に先立つ宋、元の両時代は武術を普及・進展させた重要な時期であった。両時代において中国武術の武芸化に関する萌芽状況を確認することができる。300年近くにわたって平和が保たれた明代において、戦争を前提とした武術は自己の身体鍛錬の手段、官吏の教養、健康増進や病氣予防の手段としてその性格を濃くしていった。また明代の武術は、拳術・棍術の流派が林立した時代であったことが確認されている。明代の印刷術の発達により、『正気堂集』『紀効新書』『武備志』『耕余剩技』といった武術関連の書物が数多く刊行され、これら武術関連書のなかに拳術・棍術に関する記述が多く残されている。武術関連書の編成及び刊行は、明代における武術の体系化を促す要因になった。それらの書物から確認される「図」や「解説」は、武術の技法を伝授するのに大きな役割を果たした。「図説」の分析を通して、武術の武芸化を見て取ることができる。身体鍛錬の手段、官吏の教養としての手段に関する武術の考えが武術書のなかで相次いでまとめられていくなかで、武術そのものが非実用的な技法へと洗練されていったと考えられる。ここに中国武術の「体系化」と「套路」の誕生をみることができる。明代に形成され清代において体系化がより一層進展し、中国武術は「内家」と「外家」の大きな流派を形成した。その後、中国武術はさらに、拳術と器械套路を含み、理論的にも整理されていて、今日に至るまで進展してきた。

(アジアの中国武術交流)

明代の武術関連の書物のなかで既に、当時の武術とアジアとの交流に関する文言が確認される。その代表的なものを列挙すると次のとおりである。

- ①戚継光の『紀効新書』には「影流目録」という日本刀法図が載せられている。これを参照して戚継光が「辛酉刀法」十五勢の刀法を作り出し、兵士たちに練習を命じた。「辛酉刀法」は『武備志』『単刀法選』にも転載され、そして倭刀についても説明している。韓国の『武芸諸譜』では、この十五勢を参考にして「劍勢総図」を作り上げたことが明らかにされている。
- ②明代の軍事百科全書である『武備志』、また『武編』の中には「朝鮮勢法」という剣術のことが記されている。
- ③『紀効新書』が日本、韓国に伝わり、翻訳(日本の『武術早学』『兵法奥義書』など)、再編(韓国『武芸諸譜』など)されている。

そのほか明代の武術関連の書物以外に注目してみると、日本の空手史をまとめた書物では、明代の倭寇と関わる海賊の王直が長崎を拠点として中国武術を日本人に伝授したことが記されている。また周知のとおり、明代に陳元賛の拳法が日本柔術と関係をもったとされている。今日の武術研究では、『紀効新書』と韓国の『武芸図譜通志』と日本の『兵法秘伝書』などの比較がなされ、それぞれの武術の共通と違いを明らかにし、『紀効新書』の「拳経」と『琉球武備志』の技の比較も検討されている。

16 世紀以降東アジアの文化交流
-『武藝圖譜通志』(朝鮮)と『兵法秘傳書』・『武術早學』(日本),
『紀效新書』(中国)の「拳法」-

朴貴順(韓国靈山大学校)

16 世紀末、朝鮮では朝鮮半島を戦場とした壬辰倭乱(1592、文禄の役)と丁酉再乱(1597、慶長の役)を契機として武芸研究の重要性が再認識された。『武藝圖譜通志』は、朝鮮王であった正祖の命令により、国家的事業として、中・韓・日三国の 145 種の兵法と武芸関連書籍を参考に編集され、正祖 14(1790)年、刊行された。『武藝圖譜通志』は、朝鮮時代の武芸を集大成した本で、朝鮮時代の武芸総書と言っても過言ではない。

一方、江戸期の『兵法秘傳書』と『武術早學』は、それぞれ元禄 14(1701)年、宝暦 7(1757)年に編纂・刊行されている。著者は山本勘助とされているが、彼の生没は明応 2(1493)-永禄 4(1561)と推定されており、偽書の可能性が高い。さらに、『紀效新書』は、中国十大兵書の中の一つとされる総合的な兵法・武芸書であり、中国(明代)で編纂・刊行された最も重要な武芸書である。著者は、明の軍事家・将軍であった戚継光であり、彼によって 2 種類「14 卷本」(1560、1584)と「18 卷本」(1562)が編纂・刊行されている。つまり成立年代からいえば、『紀效新書』(1560), 『兵法秘傳書』(1701)『武術早學』(1757), 『武藝圖譜通志』(1790)の順である。

さて、この三国の四書には共通する「拳法」が見られる。『紀效新書』(『武藝圖譜通志』も同様)の①「懶扎衣出門架子」、②「金鷄獨立」、③「抛架子」、④「拈肘勢」の 4 勢(動作のこと:筆者)がそれである。『武藝圖譜通志』には「拳法」は全部で 32 勢(『紀效新書』も同様)、『武術早學』にも 32 勢があるのだが、『兵法秘傳書』には 4 勢しかないからである。その 4 勢の動作を表現した「図」は四書とも酷似しているが、動作や腕や足の曲げ伸ばし方、構え方など全く同じではない。また、四書の示範者の服装はすべて異なっている。『武藝圖譜通志』は韓国風の戦闘衣服であるが、『紀效新書』は中国風の戦闘衣服か上半身裸体、いずれも最小限度の衣服である。『兵法秘傳書』『武術早學』はズボンもしくは裸体である。さらにそれらの「図」の説明である「譜」は四書それぞれに異なっている。また、四書とも「図」に描かれた示範者は、その体型から判断すると、いずれも比較的年齢の高い 30 代後半ないし 40 代以上の人物のように見受けられる。四書の動作名称はいずれも「・・勢」あるいは「・・の拳(手)」のように、同じ動作名称が用いられている。

編纂・刊行年代から、『武藝圖譜通志』と『兵法秘傳書』・『武術早學』の「拳法」は、『紀效新書』の影響を受けて、刊行されたことが考えられる。つまり日本、朝鮮とも「拳法」に関していえば『紀效新書』をモデルにしているが、しかし単純に模倣したのではなく、それぞれ工夫応用を加えて自国に取り入れているのである。

以上の内容を通じて、拳法の世界にも、16 世紀以降の中国を中心とする東アジアの文化交流の痕跡を見ることができる。

特別企画①

相撲埴輪の登場とその歴史背景

河野一隆（九州国立博物館）

人類にとってスポーツが普遍的であるのと同様に、考古資料にスポーツを形象した例も珍しいことではない。日本列島では、弥生時代以前は判然としないが、古墳時代になって鷹狩り・弓道・乗馬・急流下りなどのスポーツ場面を形象した人物埴輪や装飾付須恵器が登場する。なかでも、力士埴輪は全国で20例余りが出土しており、古くから相撲の起源との関わりで論じられてきた。考古資料からうかがえる古墳時代の相撲は、力士・行司・観客によって構成されるものであり、おそらくルールがあった。力士は裸に褌を締め、鉢巻きを巻くもので、入墨を施すことがある。また、「土俵入り」のような型があり、大王権による葬送儀礼と同時に民間芸能としても広汎に普及していたことをうかがわせるが、音楽や舞踊とは組合うものではなかったらしい。では、力士のような埴輪群像はなぜ5世紀後半に出現するのか。元来、墳頂部で衆目から隠されて行われた古墳の葬送儀礼は、出島状施設、造出と墳域外部へと移動するにしたがって、葬送儀礼の参加者もより多数の人を受け入れる形へと変質していく。そこでは埴輪群像が表現する場面に「語り」が与えられ、「神話」の発生へと繋がっていく。このような他界観と神観念の変質は、同時期に起こった生産技術・生活様式上のさまざまな画期と連携・複合しており、「画期としての雄略朝」と呼ばれている。力士埴輪が登場する5世紀後半の雄略朝は、日本の神話や芸能が萌芽した時代でもあることを、埴輪群像に登場するスポーツ場面から論じることしたい。

特別企画②

蹴鞠の故実

猪熊兼樹（九州国立博物館）

日本の蹴鞠は、世界各地にみられる蹴球のひとつであり、中国から伝わった遊戯だろうと推察される。『後漢書』は黄帝が鞠を創始したと伝え、これは蹴鞠のこととされており、日本では『日本書紀』の皇極三年(644)の法興寺の槻の樹のもとでの打毬が初見とされる。蹴鞠の懸(コート)に植樹することは、日本で発達した風習というが、最初期からすでにその形跡が認められる。王朝時代を通じて蹴鞠は遊戯として広まり、後鳥羽天皇や藤原成通という名人をうむ。鎌倉時代になって公家が家流をつくるなかで、難波・飛鳥井といった蹴鞠を家業とする家もできた。懸の式木を松・柳・桜・楓とすることも定まった。桜を式木とするあたりに、渡来の遊戯といっても、じゅうぶんに日本的となった様子が窺える。式木を駆使した技術も整ったようである。かかる作法の積み重ねによって、蹴鞠の有職故実というものが成立したのであった。南北朝時代から室町時代には二條良基や一條兼良といった有職故実の大家も蹴鞠に注目したが、これは蹴鞠そのものよりも座席の次第や装束への関心が高かったようである。飛鳥井家では『蹴鞠簡要抄』のような故実書が書かれ、それによれば蹴鞠の作法を「時節」「懸」「会者」「装束」などに分類していたことが知れる。また七夕の七遊という形で宮廷生活にはあったのであった。

表紙の絵 「針聞書」(ききはりがき)

永禄 11 年 10 月 11 日、西暦 1568 年に書かれた東洋医学に関する書。針の打ち方、針を打つ場所、からだの中にある虫の図とその治療法、臓器や体内の解剖図などが描かれている。

「針聞書」(ききはりがき)は、九州国立博物館 1 階『あじっば』奥「あじぎやら」に展示中。

虫の図は当時の人々の病気に対する考え方などがわかる貴重な資料です。

上：「馬カン (うまかん)」

心臓にいる虫。日がたって起こる。

中：「脾積 (ひしゃく)」

脾臓にいる虫。甘い物が好きで、歌を歌う。へそのまわりに針を打つとよい。

下：「キウカン」

肺にいる虫で、食物に向かって起こる。別名を肺カンともいう。虫がこの姿になると病気が治りにくくなる。針の打ち方は色々ある。

(九州国立博物館HPより 実物はカラー)

日本スポーツ人類学会第 8 回大会組織委員会

大会会長 寒川 恒夫 (日本スポーツ人類学会会長)

組織委員会

大会顧問 高倉 洋彰

(西南学院大学 観世音寺住職 九州国立博物館評議員)

大会委員長 高野 一宏 (西南学院大学)

大会事務局長 松浪 稔 (福岡女子大学)

委 員 瀬戸口照夫 (鹿児島県立短期大学)

安富俊雄 (梅光学院大学)

熊野晃三 (長崎純心大学)

萩 浩三 (日本体育大学)

田寰健太郎 (流通経済大学)

綿貫慶徳 (日本体育大学)

事務局

〒813-8529

福岡市東区香住ヶ丘 1-1-1 福岡女子大学 健康科学(松浪)研究室内

日本スポーツ人類学会第8回大会事務局

Tel:092-661-2411(福岡女子大学 代表)

Fax: 092-661-2415(福岡女子大学事務局)

E-mail:matsunami@fwu.ac.jp